

日本語教育におけるオノマトペの扱いについての一考察

兵庫教育大学 学校教育研究センター 渡 邊 裕 子

学校教育学研究 第9巻 抜刷 1997年2月

兵庫教育大学 学校教育研究センター

Reprinted from the Journal of School Education, vol. 9, 1997

Center for School Education Research

Hyogo University of Teacher Education

日本語教育におけるオノマトペの扱いについての一考察

兵庫教育大学 学校教育研究センター 渡 邊 裕 子

オノマトペとは、「擬音語」、「擬態語」の両方をさす語として用いる。オノマトペの教育は、語彙教育の枠組みの中で考えなければならない。当該学習者に、ふさわしい語彙を必要なだけ、シラバスに盛り込みたいと考える。日本の大学で学ぶ留学生にとっては、日常生活において、日本語を母語とする人々とコミュニケーションをとる必要がある。日本語話者がオノマトペを自らの言語生活の中で用いることが普通である以上、オノマトペを日本語学習者に、教授する立場をとりたい。オノマトペについては、積極的に教授するという立場を採らなければ、学習者は、未学習のままということが起ってくる。これはオノマトペが初級用のテキストにおいて、学習項目に積極的に選ばれていないという調査結果から予測できることである。既に、擬態語であることが意識されなくなった語については、わざわざオノマトペであるという情報は教授する必要がないと、テキスト作成レベルで考えられているようであるが、筆者も、それには賛成の立場を採る。知識としてのオノマトペ教育は、学習者のニーズに従って行わなければならない。学習者が、たとえ、「擬態語」とは何かの説明でき、その形態上の特徴が分かっているとしても、個々の語について、「擬態語」かどうか判別することは難しく、それが出来たところで、実際の言語生活上で語義を正しく理解し、適切に用いることが出来なければ、教育としては、成功と言えない。実際の教育上ふさわしいオノマトペの選択及び、教授法については、今後の課題とする。

キーワード: オノマトペ, 擬音語, 擬態語

1. 研究の手順・方法

最初に、オノマトペの定義を簡潔に述べる。その上で、日本語教育において、オノマトペがどのように扱われているかを調べるために、まず、初級及び、中級の日本語のテキストにおける取り上げ方を見ていく。その場合の第一の問題点は、そもそも、オノマトペという学習項目として、取り出して教授しているかどうかという点である。取り出して教授しているのなら、どのような説明の仕方であるのかが述べられることになる。次に、学習項目として立てられていない場合も含め、どのようなオノマトペがテキストに載っているかを調査する。

調査対象日本語教育用テキストのリスト

初級用

1. JAPANESE FOR TODAY (1973) 吉田弥寿夫他 学研 [JFT]
2. BEGINNING JAPANESE Part 1& 2 (1974) Eleanor H. Jordan TUTTLE [BJ1・2]
3. JAPANESE FOR BEGINNERS (1976) 吉田弥寿夫他 学研 [JFB]
4. An Introduction to Modern Japanese (1977) 水谷修他 The Japan Times [MJ]
5. 日本語初歩I・II (1981) (1982) 国際交流基金 凡人社 [初歩I・II]
6. JAPANESE FOR BUSY PEOPLE I (1984) Association for Japanese-Learning Teaching KODANSHA [JFBPI]
7. 文化初級日本語I・II (1987) 文化外国語専門学校日

本語科 文化外国語専門学校 [文化I・II]

8. JAPANESE FOR BUSY PEOPLE II (1990) Association for Japanese-Language Teaching Kodansha International [JFBPII]
9. JAPANESE FOR EVERYONE (1990) Susumu Nagara GAKKEN [JFE]
10. 初級日本語 (1990) 東京外国語大学留学生日本語教育センター 三省堂 [初級]
11. しんにほんごのきそI (1990)・しんにほんごのきそII (1993) 海外技術者研修協会 スリー エーネットワーク [きそI・II]
12. SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE VOLUME ONE (1991), TWO (1992) & THREE: NOTES (1992) 筑波ランゲージグループ 凡人社 [SFJI・II・III]

中級用

13. 中級日本語 vol 1& vol 2 (1974) 大阪外国語大学編集・発行 [阪外大中級I・II]
14. 日本語中級I (1979) 東海大学留学生教育センター 東海大学出版会 [東海大中級I]
15. 総合日本語中級 (1987) 水谷信子 凡人社 [水谷中級]
16. Spoken Japanese vol.1& vol.2 (1988) AKP同志社留学生センター 凡人社 [AKP1・2]
17. 現代日本語コース中級I (1988) 現代日本語コース中級II (1991) 名古屋大学総合言語 センター 日本語学科 名古屋大学出版会 [名大中級I・II]

18. コンテンポラリー日本語中級 (1989) 奥村訓代他
桜楓社 [コンテンポラリー]
19. 日本語中級I (1990) 国際交流基金日本語国際セン
ター 凡人社 [基金中級I]
20. 日本語会話中級I&II (1993) 高柳和子他 TIJ東京
日本語研修所 [TIJ中級I・II]
21. 中級の日本語 (1994) Akira Miura他 The Japan
Times [JT中級]

上記のテキストは、手に入りやすいこと、日本語教育の現場で用いられることが多いと考えられること、教材としての歴史を振り返る際に触れておきたいと、筆者が考えるものを中心に選んだ。すべての教材を調査することは、初めから意図していないことを断っておきたい。なお、本論文の中で各テキストについて言及する際、便宜上 [] 内に書かれている略語を用いる。

2. オノマトペとは何か

本稿では、擬音語、擬態語をまとめて、オノマトペと表現している。「擬音語」は、生物、無生物の出す音を表す語である。「擬態語」は、生物、無生物の動作、状態等を音で象徴的に表現する語である。オノマトペの代わりに、「音象徴語」と呼ばれる場合もある。

金田一 (1978) では、「擬音語」を無生物の音を表す「擬音語」と生物の声を表す「擬声語」に、そして、「擬態語」を無生物の状態を表す「擬態語」、生物の状態を表す「擬容語」、人間の心の状態を表す「擬状語」に分類している。しかし、個々の語を厳密に分類することは、容易ではないし、「擬音語」「擬態語」以上に分類することは、教育上は、必要ないと考える。

3. オノマトペの取り扱いの実際

初級用テキスト12種類において、オノマトペについて、項目を挙げて説明をまったく行っていないものは、7種類であった。なんらかの形で、話題としているのは、5種類である。

[JFT] においては、副詞の一つとして、第22課の文法の欄に 'Onomatopoeia' という見出しのもとに、英語による説明がなされている。

「他の言語同様、日本語は、オノマトペと呼ばれる語が豊富である。その中のあるものは、ただ音を真似るのに用いられる。」(筆者訳) (吉田他1973 p.266) 「しかし、非母語話者にとってもっと難しいことは、行為、出来事が起こるさまざまな様態を記述するために、それらが用いられることである。」(筆者訳) (同上 p.267) 同じページにおいて、英訳と共に、オノマトペを用いた例文が挙げられている。

紹介されている語は、「パンパン、わんわん、はっき

り(と)、ゆっくり(と) どんどん、しっかり(と)」である。[JFT] では、新出の語句は英訳と共に、リストアップされているが、その時オノマトペであるものについては(onomat)という情報が付けられている。

[JFB] では、UNIT25の 'Look & Learn' において、Sounds And Noises Everywhereというトピックのもとで、イラストと共に、「ワンワン、ガチャン、チックタック、ブーブー、キーン、グーグー、ニャーニャー、オギャーオギャー、コンコン、パタン、コケコッコー」の11の語が紹介されている。なお、テキストではこれらの語はローマ字表記である。「これらは、その後、'と' を付けて、副詞として用いられる。」(吉田他1976 p.160) という説明がなされている。しかし、オノマトペであるというような説明は、一切ない。

[初歩I・II] では、15課の「れんしゅう」において、(1) 犬は「ワンワン」といって、なきます。のような文の形の中で扱われている。その他、それぞれ動物のイラストと共に、「ニャーニャー、モーモー、ブーブー、チューチュー」という語が紹介されている。[初歩I・II] においても、オノマトペという語彙の概念などについては、一切記述がない。

[JFE] では、第23課において、'Useful expressions' の病気のところで、「がんがんする、ずきずきする、しくしくする、きりきりする、どきどきする」が英訳と共に、出ているが、オノマトペに付いての情報は、全く記述されていない。

[SFJI・II] では第九課において、'How to explain your symptoms' というタイトルのもと、'Type of pain' の中で「がんがんする、ずきずきする、きりきりする」が、'General symptoms' の中で、「むかむかする、くらくらする」が紹介されているが、オノマトペであるとの情報は、全く、記述されていない。

次に、中級用テキストに移る。9種類の中級用テキストのうち、オノマトペについて、なんらかの形で、記述があるのは、5種類である。

[阪外大中級I・II] では、第十三課の「まとめ」において、情態の副詞の中の一つ種類、「ぎ音・ぎ態語 (Onomatopoeic words)」として、例文と共に、「ゆっくり(と)、のんびり(と)、ざあざ(と)、きらきら(キラキラ)(と)、さっと、はっと」の6語が紹介されている。又、例文なしに、「どんどん、すらすら、ぱっと、ぎっしり」が載せられている。さらに、第二十九課では、「まとめ」のところで、「する」の注意すべき用法の一つとして、「ぎ音語・ぎ態語+する」が挙げられ、例文と共に、「いらいらする、ガタガタする、ザラザラさする、ゆっくりする、がっかりする、びっくりする、ぼんやりする、はっとする、はっとする、かっとする」及び、例文なしで、「びっくりする、ビクビクする、ビクッとす

表 1

	JFT	BJ	JFB	MJ	初歩	JFBP	文化	JFBPI	JFE	初級	きそ	SFJ
ちょうど		○		○						○		○
ゆっくり	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○
きつと		○		○							○	
はっきり	○	○		○			○	○			○	
もっと		○			○							
ずっと		○	○	○			○			○	○	○
ちよつと		○	○	○	○	○	○	○		○	○	○
びっくり		○									○	
やつと		○									○	
すっかり		○								○		
ようやく												
きちんと							○				○	
しっかり	○										○	
ほんやり	○											
ちゃんと							○					
ちつとも		○										
がっかり												
にこにこ									○			
(その他)												
そろそろ					○			○		○	○	○
どンドン	○						○	○		○		

(○印は当該テキストにおいて、当該の語が提出されていることを表す)

る」が載っているが、それ以上の説明記述はない。

〔AKP1・2〕では、第8課の「構文II」の中で、'Onomatopoeic words'という見出しのもと「日本語は、いわゆるオノマトペと呼ばれる語が豊富である。」「オノマトペは又、行為、出来事が起こる様々な様態を記述するのに用いられる。(しばしば、カタカナで書かれる。)」(筆者訳)(AKP 1988 p.100)という説明と共に「ワンワン、ニャーニャー、じろじろ見る、くすくす笑う」が紹介されている。又、語彙リストにおいて、当該の語には、(Onomat)という情報が与えられている。さらに、第38課においては会話文中に出てくるだけではなく、オノマトペが3ページにわたって扱われている。'Onomatopoeia'の見出しのもと、「a. 擬声語、擬音語: a cry or sound expressed as a word.」(同上p.172)「b. 擬態語: describes an action, an attitude or an appearance.」(同上p.173)のように分類されている。擬声語、擬音語については、さらに、声(馬 ヒヒーン、牛 モーモー、猫 ニャーニャー、犬 ワンワン、豚 ブーブー、羊、山羊 メーメー、ねずみ チューチュー、すずめ チュンチュン、からす カーカー、にわとり コケコッコ、せみ ミーンミーン、カナカナ、かえる ケロケロッ、ゲロゲロ)音(ガチャンと、ピリッと、

バリッと、トントン(と)、ドスンと、パーンと)自然の音(雨 ぽつぽつ、ばらばら、ざーざー、しとしと、雷 ごろごろ、風 そよそよ、ぴゅーぴゅー、びゅーびゅー、川・水 さらさら、ざあざあ、ごうごう、ざぶざぶ、じゃぶじゃぶ、せき こんこん、ごほんごほん)と3つに分けて、それぞれ語の紹介がなされている。擬態語も、14に下位分類され、それぞれの語が紹介されている。

1. 笑い方 にこにこ、にやにや、にたにた、くすくす ー笑う
2. 泣き方 しくしく、めそめそ、わんわん、わーわー ー泣く
3. 見方 じろじろ、きょろきょろ、じつと、じろっと、ちらっと、 ー見る
4. 寝方 すやすや、ぐうぐう ー寝る
5. 歩き方 さっさと、すたすた、よちよち、ぶらぶら、とぼとぼ ー歩く
6. 飲み方 ごくごく、がぶがぶ、ちびちび ー飲む
7. 食べ方 ぱくぱく、もぐもぐ、がつがつ ー食べる
8. 話し方 べらべら、べらべら、ひそひそ、ぼそ

表 2

	阪外大	東海大	水谷	AKP	名大	コンテン ボラリー	基金	TIJ	JT
ちょうど									
ゆっくり	○			○	○			○	○
きつと	○				○	○		○	
はっきり	○	○		○	○	○	○	○	
もっと					○	○		○	
ずっと	○				○	○	○		
ちよつと			○		○	○		○	
びっくり	○				○			○	
やつと	○				○	○			
すっかり	○	○			○	○	○		
ようやく									
きちんと		○			○				
しっかり		○		○	○	○	○		
ほんやり	○						○		
ちゃんと					○		○		○
ちっとも	○								
がっかり	○				○		○		
にこにこ				○	○	○			○
(その他)									
そろそろ	○				○			○	○
びったり	○			○		○		○	
ほっ		○			○		○		
ペラペラ			○		○				○
どンドン		○				○			○

ぼそ、ぺちゃくちゃ 一話す

ずけずけ、ぶつぶつ 一言う

9.動き方 もたもた、もじもじ 一する

10.怒り方 ぶんぶん、かっと (かんかんに) 一怒る

11.光り方 ぴかぴか、きらきら、ちかちか、てかてか、きらきら 一光る

12.味 ぴりっと、すかっと、こってり、あっさり、さっぱり 一する

13.さわった感じ つるつる、すべすべ、べたべた、ざらざら、ぬるぬる、ねばねば、ふかふか、さらっと 一する

14.におい ぶんと、ぶーんと 一におう、においが一する (同上p.173)

[名大中級I・II] では、第7課の文法の欄において‘Adverbs (1)’で、扱われている。

「日本語には、擬音語 (日常生活における実際の音の

直接音声表現) 及び擬態語 (現象あるいは人間の心理的情態の音声表現) と呼ばれる音象徴語が豊かである。すべて、副詞として用いられる。擬音語及び擬態語は、主に話言葉において用いられる。語によって、“と”を伴う場合もあるし、伴わない場合もあるのが普通である。」(筆者訳) (名古屋大学総合言語センター日本語学科 1988 p.187) そこで、紹介されているのは、「ぼたぼた(と)、ざあざあ(と)、ゆっくり(と)、はっきり(と)」である。第7課で扱われる以前の課である第4課の読む練習「地震」の本文中「ガタガタと(動く)、ガチャーンと、バーッと(飛ぶ)、バラバラ(ふってくる)、ゾッと(する)、ガッチリと(とめる)、ゴチャゴチャ(おく)、ピタッと(止る)」が用いられているが、「ゾッとする(shudder(with fear))」(同上 p.117) 以外は、単語表にも載っていないし、オノマトペであるという情報も、全くない。第10課の「モグモグ、パクパク」、第12課の「ガチャガチャ」、第17課の「バーンと、ピピピピッと」にたいしてのみ、オノマトペであるという情報が付加さ

れている。しかしながら、「ずきんずきんする (feel a throbbing pain)」(L14), 「もりもり (した) (big (muscles))」(L17) のように、語彙リストにおいて、英語による訳しか与えられていないものも見られる。

「TIJ中級I・II」では、第12課に「《会話 7》気持を表すことば・擬態語」という見出しが挙げられ、会話文中に、「どきどき (する), わくわく (する), はらはら (する)」が用いられている。さらに、練習8において、例文と共に、「ゆっくり, もぐもぐ, ごちゃごちゃ, どきどき (する), うきうき (する), はらはら (する), わくわく (する)」が紹介されている。しかしながら、オノマトペ自体の説明の記述は、全くない。

「JT中級」では、第12課において、'NOTES ON GIONGO AND GITAIGO' というタイトルのもと、1ページを擬音語と擬態語の説明に当てている。

「日本語には音象徴の豊かなシステムがある。おおまかに言うと、二つのカテゴリーに分けることが出来る。即ち、擬音語 (phonomimes, onomatopoeia) 及び、擬態語 (phonomimes, psychomimes) である。擬音語は、現実の音を真似た語を表している。英語にも又、動物のもたらす音のような、そういったものがいくらかある。」(筆者訳) (Akira Miura他 1994 p.254)

「擬態語は印象に基づいて状態, 感情, 行為の方法を表す語である。英語にも又, 'rolly-poly(まるまるした)', 'shilly-shally(ぐずぐずする)' のような擬態語に似た語がある。」(筆者訳) (同上 p.254)

「ここで英語と日本語の間には3つの重要な違いが存在する。まず、英語において、もし人が余りにも多くの擬音語あるいは擬態語を使って話すならば、子供っぽく聞こえるという危険を犯すかも知れない。日本語では、犬の変わりにワンワンというような赤ちゃん言葉で特に用いられるオノマトペを用いる場合を除いては、こういった心配は存在しない。第2に英語では, 'slam(ピシャリとしめる), whaack(バシッと打つ), flash(ピカッと光る), slick(なめらかな), smooth(なめらかな), plump(ドシンと落ちる), glisten(ピカピカ光る)' 等のような、元々擬音語あるいは擬態語であった動詞及び形容詞が現実によくあるのだが、もはやそういったものとしては見なされていない。一方、日本語においては、擬音語及び擬態語の多くは、しばしば「と」が付加されて、副詞として用いられている。」(筆者訳) (同上 p.254)

「第3番目は、(そしてこれは上述の第2番目と関連しているのだが) 英語において全く異なる動詞が関連する行為に対して用いられる場合が非常に多いのに対して、一方日本語においては、一つのそして同じ動詞が異なる擬音語あるいは擬態語を付加して働く。」(筆者訳) (同上 p.254)

ここで紹介されている語は、「わんわん, にゃーお,

もー, どん, ずどん, ぼたぼた, どしん, どさっ, 「きりきり(と) 痛む, しくしく(と) 痛む, ぼんぼん(と) 質問する, ぼそぼそ(と) 話す, のらりくらり(と) 話す, 「げらげら笑う, くすくす笑う, にやっと笑う, にこにこ笑う」である。

4. 教材としての日本語教育用テキストの調査から分かること

調査した、12種類の初級用テキストで、オノマトペを積極的に、シラバスに取り入れていたのは、[JFT] だけであった。[JFB] では語の紹介に留まっていたし、[初歩I・II] でも同様である。二つの共通点は、動物の鳴き声を扱っているということである。擬音語が紹介されていたのである。[JFE], [SFJI・II] では、病院、医院で自らの症状を説明するために必要な語彙として、擬態語を紹介している。しかし、「擬態語」自体について言及していないところから見ると、知識としてのオノマトペを与えることは意図していないと考えられる。一方、[JFT] では擬態語が学習者にとって、難しいものである事が、指摘されている。ここで、テキストに載っている「はっきり, ゆっくり, どんどん, しっかり」は、実際のところ、普通の副詞として認識されていてわざわざ、擬態語なのですよと指摘されなければ、気がつかないかも知れない。そこで、見ることの出来た18種類の国語辞典で、上記の4つの語について、「擬態語」であるという情報が記載されているかどうかを調べた結果、18冊すべてにおいて、全く記載されていないということが分かった。18種の国語辞典のリストは以下の通りである。

1. 日本国語大辞典 (1972) 日本大辞典刊行会編 小学館
2. 角川国語中辞典 (1973) 時枝誠記他 角川書店
3. 学研国語辞典 (1978) 金田一春彦他 学習研究社
4. 詳解国語辞典 (1985) 山口明穂他 旺文社
5. 現代国語例解辞典 (1985) 林巨樹 小学館
6. 岩波国語辞典第四版 (1986) 西尾実他 岩波書店
7. 言泉 (1986) 林大 小学館
8. 新選国語辞典第六版 (1987) 金田一京助他 小学館
9. 例解新国語辞典第二版 (1988) 林四郎他 三省堂
10. 三省堂国語辞典第三版 (1988) 見坊豪紀他 三省堂
11. 新明解国語辞典第三版 (1988) 金田一京助他 三省堂
12. 大辞林 (1988) 村松明 三省堂
13. 現代国語辞典 (1988) 市川孝他 三省堂
14. 福武国語辞典 (1989) 樺島忠夫他 福武書店
15. 日本語大辞典 (1989) 梅棹忠夫他 講談社

16. 広辞苑第四版 (1991) 新村出 岩波書店
 17. 集英社国語辞典 (1993) 森岡健二他 集英社
 18. 学研現代新国語辞典 (1994) 金田一春彦 学習研究社

18冊の辞書を調べたにもかかわらず、「擬態語」という情報が載せられていないということは、国語辞典作成に当たって、「擬態語」という語彙情報が必要なものと考えられていないということを、表していると考えられる。ちなみに、『日英擬音・擬態語活用辞典』(1984)と『擬態語・擬音語分類用法辞典』(1990)には、4語とも載っていた。実際のところ、授業で、擬音語、擬声語、擬態語という分類をして、語彙教育をしても、国語辞典に学習を助けるような情報が欠けていれば学習者にとってはあまり助けにならないと分かった。

オノマトペをシラバスに取り上げていない他のテキストにおいても、会話文、練習等の中に、オノマトペと分類できる語が全く出てこないというわけではない。ただ、それに焦点が当てられてはいない。個々の語について見ると、単語リストに載せられているものと載せられていないものがある。対訳が英語で与えられているものが、[JFT], [BJ1・2], [JFB], [MJ], [JFBPI], [JFBP II], [JFE], [SFJI・II・III] の8種類であり、リストはあっても、対訳のないものが、[初歩I・II], [初級] の2種類である。[文化I・II] は、単語リストそのものが存在しない。[きそI・II] は、単語リストはなく、索引が付いているが、対訳はない。語彙に対する扱いに差があることが分かる。これは、語彙教育をどのように考えるかを表しているといえる。語彙教育については、章を改めて、論じる。

中級用テキスト9種類において、オノマトペが積極的にシラバスに選ばれているものは、[阪外大中級I・II], [AKP], [JT中級] の3種類である。曲がりなりにも、オノマトペの一部に触れているものが、[名大中級I・II], [TIJ中級] の2種類である。[阪外大I・II] では第13課において、「擬音語、擬態語」という語が紹介されているのだが、'Onomatopoeic words' という訳語の他になんら説明はなく、例文自体も前後の脈絡なしの1文の例文であり、英語による訳も付けられていないため、教授者の説明なしには、理解するのは困難であることが予測される。第29課の動詞としての用法についても同様である。例文が付加されているものも、やはり、前後の脈絡に欠けているし、英訳も付いていない。どのような語義を持ちどのような状況で用いることが出来るかということについての情報が欠けている。[AKP] での扱いは、「擬声語、擬音語」、「擬態語」という語についての説明がなされている。そして、オノマトペの提示方法については、2つの方法を取っている。1つは、[阪外大

I・II] と同じく、例文によるものである。英訳が付いておらず、前後の脈絡のない1文であることも同様である。もう1つは、一緒に用いる動詞と併記するやり方である。しかし、たとえば、「ぼつぼつ降る」と「ばらばら降る」はどう、違うかについては、日本語によっても、英語によっても全く情報が与えられていない。[JT中級] でのオノマトペの扱いは、[AKP] のようにオノマトペの世界に含まれる多くの語を紹介しようというのではなく、オノマトペ自体に付いて知識を与えるものとなっていると言える。英語との比較により、オノマトペが日本語の語彙の中で、どのようなものかを伝えようとしている。紹介されているそれぞれの語については、英語の訳が添えられているので、英語を理解するものにとっては、分かりやすいものとなっている。

オノマトペを学習項目として扱っていないテキスト中に、オノマトペに属する語が出てくるのは初級用テキストの場合と同様である。単語(語彙)リストに、挙げられている場合もあるし、ない場合もある。なお、訳語が付けられていないテキストは[コンテンポラリー]、[基金中級I] である。

初級用テキストに比べ、中級用テキストでは、オノマトペがシラバスに選ばれる事が多く、又、選ばれた場合、その扱い方は、丁寧になっていると言える。紹介される語の数も、中級用テキストの方が多いし、オノマトペ自体についての知識も与えようとしていると言える。しかしながら、中級レベルでオノマトペを必ず学習項目に入れなければならないという事にはなっていないことが分かった。さらに、或る語が、オノマトペであるという情報を、単語(語彙)リストに載せる必要を認める立場は少ないということが分かった。

5. 語彙教育とオノマトペ

日本語教育も言語教育の一つであるので、対象となるものは、当該の言語、日本語である。学習者が、日本語について、何を習得したか、学習したかが教育の結果として問われることになる。学習者の様々なレベルでの多様化の中で、理想的な一つのシラバスを作ることは、全く非現実的である。現実の日本語の言語活動の世界において話言葉であれ、書き言葉であれオノマトペが用いられている以上、オノマトペを無視することも又、非現実的であろう。コミュニケーションの為に日本語を習得するということが半ば自明の事となった現在、いかに教えるかのレベルで工夫がなされている。シラバスも複数の種類があるわけだが、例えば、構造シラバスを採用するにせよ、機能シラバスを採用するにせよ、或る言語形式を基に教授することになる。やはり、言語形式に焦点が当てられているのである。教授者自身が、音声教育、文法教育、文字教育といった分類で、自らの教育に焦点を

当てようとすることは、普通に行われていると言える。しかしながら、語彙教育というのは、余りにも意識化されることが少ないのではないだろうか。初級レベルでは、特に文型に焦点が当てられるので、語彙も又、重要な教授項目であることを忘れがちである。母語においては、年齢にふさわしい言語表現が出来るにもかかわらず、日本語で必要な概念を表す語を知らないばかりに、コミュニケーションが出来ないのでは、日本語教育がうまく行われていないことになる。中級以上になると、学習者のニーズにもよるが、大学で学ぶ留学生の場合、彼らの専門との係わりにおいて、語彙教育が問題とされるようになる。しかし、オノマトペについては、積極的に、教授するという立場を採らなければ、学習者は未学習のままということが起ってくる。これは、初級用のテキストにおいて、学習項目に積極的に選ばれていないという、調査結果から予測出来ることである。あらゆる日本語学習者が、必ず積極的にオノマトペを学習するべきであると主張するつもりはないが、日本の大学で学んでいる外国人留学生の場合、日本語を母語とする人々とのコミュニケーションを日常的に行わなければならないわけであるから、オノマトペの学習は必要であると考えている。

語の形態と、その意味との関係は、元々恣意的である。約束事として、一つ一つ学び、身に付けていく必要がある。オノマトペも同様である。もちろん、擬音語、擬声語については、自然音をありのまま写したものと説明されたりする。しかし、当該言語を、母語としない学習者が、或る一つの音声表現を耳にしたり、文字表現を目にただけで、その意味を推測出来ると考えるのは妥当ではない。まして、母語話者のように長い時間を語彙習得にかけるわけにはいかないのである。

語彙教育の方法の中で、語義の教育について、メディアによる分類が、『語彙の研究と教育(下)』(国立国語研究所 1985 p.166)に出ている。

- (I) 直接的方法 実物による方法
- (II) 間接的方法
 - (1) 非言語的方法(感覚的方法)
 - 代用物による方法
 - (2) 言語的方法(概念的方法)
 - 日本語による方法 説明法
 - 文型法
 - 例文法
 - 媒介語による方法 翻訳法
 - 説明法

オノマトペの語義を教えるのに、上記で述べられている、7つの方法が利用できるかどうかを考えてみたい。

オノマトペは副詞、あるいは、するを付加した動詞として、用いられることが普通であるのだが、可能である

なら、直接的方法是経験に基づくわけであるから、理解しやすいと言えよう。代用物による方法も、現在では、コンピュータ・グラフィックス、ビデオ映像、オーディオ・テープによる録音も使えるので、利用すべきである。特に、ビデオ教材は余計な情報は排除した形で、状況が明確にされるので、利用を積極的に行うことを勧めたい。新しい語彙を既習の日本語を用いて説明する方法は、可能な限りにおいて、用いられるべきであるが、あらゆる語についてうまくいくとは限らない。その場合、媒介語に頼らざるをえないと考える。それも、単なる翻訳法というのは、何時も可能とは限らない。対応する語が、媒介語にない場合があるからである。その際は、媒介語による説明法が用いられることとなる。オノマトペの場合、例文法というのが、実際のテキストにおいて、よく用いられていることが調査の結果分かったが、前章において述べたように、前後の脈絡のない1文においてのみ扱われているのでは、語義の理解は、容易とは言えない。[AKP]のテキストにあったように、動詞との組み合わせを考えて、分類することはオノマトペの意義を教授するために役に立つことではあるが、個々の語の意義を教授するには、上記の7つの方法のうち、ふさわしいものを用いなければならない。

調査した、21種類のテキストにおいて、同じだけのオノマトペが扱われていたわけではない。実際には、どの語を教えるべきかが問題となる。それについて、玉村(1989)は、『日本語教育のための基本語彙調査』(1984)に基づく、18語を日本語教育の初級段階で教えるべき音象徴語の基本語としている。それは、「ちょうど、ゆっくり、きつと、はっきり、もっと、ずっと、ちょっと、びっくり、やつと、すっかり、ようやく、きちんと、しっかり、ぼんやり、ちゃんと、ちっとも、がっかり、にこにこ」である。(上記18の語が21種類のテキスト中に用いられているかどうか、及びその他によく用いられているオノマトペについての調査結果は表1、表2を参照のこと。)ここには、擬音語、擬声語は入っていない。調査の結果からは、実際の初級用テキストではむしろ擬音語、擬声語に、そして、擬態語としても、病気の症状を、伝えるための語彙としての擬態語に焦点を置いていることが知られる。良く使われる、擬態語であっても、良く使われるがゆえに、わざわざ擬態語である意識しする必要がなくなっているものについては、カリキュラム編成上時間の余裕のない時には、オノマトペとして、シラバスに取り上げることがないのが日本語教育の現状であるし、それについては、筆者も賛成の立場を採る。もちろん、語彙体系としてのオノマトペの世界についての知識を学習者に与えることが、目標とされる場合には、学習者のレベルにかかわらず、正確で、必要十分な知識が教授されるべきである。しかし、たとえ、オノマトペ

の形態上の特徴について、知識を持っていたとしても、日本語を母語としない学習者が、或る語を例えば、単なる副詞であるか、擬態語であるか判断することは、難しい。既に述べたように、国語辞典はこの点について、全く役に立たないのであるから、なおさらである。学習者にとっては、或る語が擬態語であると知っているよりは、その語の語義が分かり、言語生活上、適切に使えるかどうかの問題である。この点に焦点を置き、語彙教育としてのオノマトペ教育を考えなければならないのである。そこで、教育上の対象となる語彙の選択が次の課題となってくる。学習者のニーズに従い、適切な語彙を選択する必要がある。日常生活語彙としてのオノマトペがまず、選ばなければならない。日本語教育用テキストにも載っていた、病気の症状を述べるのに必要な語彙、気持ちを表すのに欠くべからざる語彙が決定されるべきであるが、これは、今後の課題としたい。

さいごに

現実の日本語教育においては、教材としての日本語のテキストを筆者が調査した限りでは、どのような語彙をどれくらい、各レベルで教えるべきかについて共通の理解はまだなされていないと言える。語彙教育を積極的に行おうという姿勢も、あまり見られないようである。オノマトペ教育についてのガイドラインが出来上がっているわけではないことが分かった。日本語を教授する側にあっては、オノマトペの世界について、自らが充分知識をもつことを前提とし、自らのかかわる学習者に必要なオノマトペをどのように選択するのか、又、どのように提示し、語義と用法を理解させていくのかという問題が残されている。日本語教育の現場にいる者として、引き続き、この問題に取り組んでいきたい。

引用文献

- AKP同志社留学生センター (1988) “Sponen Japanese vol.1&2” 凡人社
 金田一春彦 (1978) 「擬音語・擬態語概説」『擬音語・擬態語辞典』 浅野鶴子編 角川書店
 国際交流基金 (1981) 『日本語初歩I』 凡人社
 三浦昭 (1994) 『中級の日本語』 The Japan Times
 NAGARA,S (1990) “JAPANESE FOR EVERYONE” GAKKEN
 名古屋大学総合言語センター日本語学科編 (1988) 『現代日本語コース中級I』 名古屋大学出版会
 名古屋大学総合言語センター日本語学科編 (1990) 『現代日本語コース中級II』 名古屋大学出版会
 日本語教育学会 (1990) 『日本語教育ハンドブック』 大修館書

店

- 大阪外国語大学編集・発行 (1974) 『中級日本語vol.1&vol.2』
 高柳和子他 (1993) 『日本語会話中級』 TIJ東京日本語研修所
 筑波ランゲージグループ (1991) SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE VOLUME ONE: NOTES 凡人社
 筑波ランゲージグループ (1992) SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE VOLUME TWO&THREE: NOTES 凡人社
 吉田弥寿夫他 (1973) “JAPANESE FOR TODAY” 学習研究社
 吉田弥寿夫他 (1976) “JAPANESE FOR BEGINNERS” 学習研究社

参考文献

- 阿刀田稔子・星野和子 (1989) 「日本語教材としての音象徴語」『日本語教育68号』 日本語教育学会
 天沼寧 (1989) 「擬音語・擬態語」『日本語教育68号』 日本語教育学会
 アンドルー・チャン (1990) 『〈和英〉擬態語・擬音語分類用法辞典』 大修館書店
 日向茂男 (1990) 「擬音語・擬態語」『講座日本語と日本語教育第7巻 日本語の語彙・意味(下)』 明治書院
 井嶋悠他編 (1995) 『日本語のオノマトペ — 食べる音や様子を中心に — (解説書)』 大阪外国語大学AV技法研究会
 泉邦寿 (1976) 「擬声語・擬態語の特質」『日本語講座4 日本語の語彙と表現』 大修館書店
 甲斐睦朗 (1991) 「語彙指導」『講座日本語と日本語教育第7巻 日本語の語彙・意味(下)』 明治書院
 寛数雄他 (1993) 『オノマトピア・擬音・擬態語の楽園』 勁草書房
 金田一春彦 (1978) 「擬音語・擬態語概説」『擬音語・擬態語辞典』 浅野鶴子編 角川書店
 国立国語研究所 (1984) 『日本語教育のための基本語彙調査』 秀英出版
 国立国語研究所 (1984) 『語彙の研究と教育(上)』 大蔵省印刷局
 国立国語研究所 (1985) 『語彙の研究と教育(下)』 大蔵省印刷局
 日本語教育学会 (1990) 『日本語教育ハンドブック』 大修館書店
 尾野秀一編著 (1984) 『日英擬音・擬態語活用辞典』 北星堂
 大谷洋子 (1989) 「擬態語の特徴」『日本語教育68号』 日本語教育学会
 玉村文郎 (1989) 「日本語の音象徴語の特徴とその教育」『日本語教育68号』 日本語教育学会

A Study on How Onomatopoeia is Handled in Teaching Japanese as a Second Language

Yuko Watanabe

(Center for School Education, Hyogo University of Teacher Education,
Yamakuni, Yashiro, Kato-gun, Hyogo 673-14 Japan)

The purpose of this paper is to show how 'onomatopoeia' is handled in 'Teaching Japanese as a Second Language'. Japanese Language textbooks of 21 kinds for foreigners were investigated for this purpose. In this paper, the term 'onomatopoeia' is used to refer to both 'giongo' and 'gitaigo'. 'Giongo' can be defined as 'a cry or sound expressed as a word' and 'gitaigo' as 'a word which describes an action, an attitude or an appearance'. We should notice that teaching 'onomatopoeia' is a part of 'vocabulary teaching'. We must draw attention to the fact that foreign students studying at a university level in Japan need to communicate with the native speakers of Japanese, who employ 'onomatopoeia' daily. I would like to emphasize that 'onomatopoeia' must be taught as a part of a syllabus. It has been proved that 'onomatopoeia' is not considered as one of the most important teaching items at the elementary level. It can be said that learners of Japanese will be left with no knowledge on 'onomatopoeia'. The textbook authors seem to think that it is not important whether or not a certain word is a 'gitaigo' if it is already regarded as an ordinary adverb. And the present writer takes a similar view. How many onomatopoeias and how much knowledge on 'onomatopoeia' to teach depends on each need of each learner. As a matter of fact, it is very difficult to identify a certain word as a 'gitaigo', even if learners have knowledge about 'onomatopoeia'. It is more valuable and useful for them to be able to use each onomatopoeia properly than to have profound knowledge about it. We can say that we have succeeded in teaching 'onomatopoeia' only when learners come to be able to use it in their daily life. It remains to be proved that a certain onomatopoeic vocabulary is indispensable for learners through practical research on onomatopoeia.

Key words: onomatopoeia, vocabulary teaching